

hidarimakiの
この逸話

鉄道員

原題：IL FERROVIERE



監督：ピエトロ・ジェルミ
脚本：カルロ・ボンティ
音楽：カルロ・ルスティケリ
キャスト：ピエトロ・ジェルミ
シルヴァ・コシナ
エドアルド・ネグロ
製作：1956年イタリア制作
カラー110min
DTC版：株式会社MARGA TV

映画『鉄道員』はラジオから流れるサウンドで知った。あの曲の最後のほうで怒ったようなセリフが聞こえる。どんな意味か知りたかったが、あれは登校中の少年の友人が、「急げマルコ」と走りながらしゃべるシーンであったことを、後に映画を見てわかった。作曲はカルロ・ルスティケリ。ピエトロ・ジェルミが『鉄道員』の後、59年に発表した作品『刑事』で、アリダ・ケツリがアモーレ、アモーレと歌う主題歌『死ぬほど愛して』でブレイクしたが、この作曲もまたルスティケリであった。いずれもマイナーコードの暗くて哀しい旋律が、ドラマの陰影をより深くした。ニーノ・ロータ（2月号参照）同様、イタリア映画を語る上で忘れられない作曲家である。

クリスマスの夜、機関士の父を待つ少年が駅に向かう姿と、駅へと疾走する列車が交互に写される冒頭のシーンから、ワクワクする少年の心が僕の心に同化してしまった。しかし、酒場に直行する父親とそんな

父を疎ましく思う家族とのかい離を、少年は哀しく見つめるだけだった。『鉄道員』は、父に畏敬と怖れを抱きながらも、大きな存在として見つめる少年の視線を通し、変り行く世相を描いた秀作であり逸編だと思う。

姉の死産に、「僕はおじさんになり損ねた」というセリフで笑わせるも、その後家族に続く災厄—列車事故、長男の引きこもり、長女の離婚—そしてそんな不幸をすべて引き受ける母の優しさが際立って美しい。父は、家族の不幸が自分のせいであると心で認めつつ、しかし、「正義の労働組合は自分たちの為には存在せず、利口なやつばかりが出世する。オレはボロ機関車の運転手だ」とさげすむ。プロレタリアを描くがプロレタリア映画ではない。稚拙なプロパガンダも出てこない。むしろこの映画の背景には繊細な味覚が隠されていて、例えば貧しいアパートで起こる家族の葛藤の背景に聞こえる台所の水滴音、湯沸しの音、ローマ市中を行く主人公たちの背後には、戦後の住宅政策として急速に建てられていく真っ白な公営住宅など、市井の息遣いを感じてしまう。デ・シーカの『自転車泥棒』（50年伊）と同様、生活者のまなざしが愛しいのだ。

少年は「どうしてみんな仲が悪いの」と母に聞く。母は「一緒に住んでいても話をしないからよ」と話す。父は家に帰らない。兄も姉も便りが無い。孤独と寂しさで家族がばらばらになっていく哀しさには切実な実感がある。クリスマスの夜、友が集まり、歌いダンスを踊り、そして姉や兄も帰ってきた。家族の回復を予感した直後、父は息を引き取ってしまう。こうしてひとつの家族が消え世相も時代も急速に変化していく。

hidarimaki



過日、部落解放同盟の全国大会に参加した。狭山事件の再審請求で、裁判長が、検察に、犯行現場とされる雑木林でのルミノール反応結果報告書等、8点の証拠を提出するよう求めたことから、狭山の質疑が多かった。長い会議だったので、ボクは、菅直人財務相みたいに目を閉じて(菅さん同様、ボクも居眠りしていたわけではない)、30数年前のことを思い出すことに忙しかった。

あの頃ボクは、死刑台から生還した八海事件の阿藤周平さんとも、松山事件の斎藤幸夫さんとお母さんとも、大阪で呑んだことを思い出した。かつて『なび』でも書いたが、石川一雄さんを東京高裁の第二小法廷で見たのも同じ頃だった。阿藤さんも、斎藤さんも、政治色などまったくない、純朴で、ごく普通のおじさんだった。とくに呑みでる時はそうだった。その阿藤が、石川さんのことをとても気づかっていたこと、斎藤さんのお母さんが、狭山事件で大集会が開かれたことを喜んでおられたことを思い浮かべながら、冤罪というテーマを通じた「権力」と「人権」の関係の、あの頃の「時代の空気」に触れていた。

同じ頃、「人権展」というイベントを担当し、初老の女性の見学者に語りかけられた言葉が蘇った。「私が若い頃、新憲法があっても、結婚は自由じゃなかった。家柄が違くと反対され、駆け落ちしたけど、やっぱり帰った。その頃、誰に聞いたか覚えていないが、結婚差別は憲法違反だと訴え出た女性

がいてと聞き、赤い糸で結ばれているかもと、励まされた。ずっと後になって、部落の人だったと知った」。ボクは、あの頃の「赤い糸」に思いを馳せた。

全国大会では、夏の参院選挙のことにも話題が集まった。ボクの恩人というか、友人の比例区での再選を応援することを決めた。友人は「取り調べの可視化法」や「人権侵害救済法」の制定に意固地なほどにこだわってきた。部落解放運動は、憲法がまだよちよち歩きだった頃、確かに、この国の無数の人々の「赤い糸」だった。狭山事件が、ひとつの「時代の空気」をつくったことも、また確かなことだった。ボクは、友人が発言の中で何度か繰り返した「泣き寝入りしなくていい社会」という言葉に強い共感を感じた。

ボクは、民主党は、今度の参院選挙では、あまり政権選択に固執しない方が良くと思う。多様な価値観を寄せ合うこの国のすがたカタチをおおらかに包み込むものであって欲しいと思う。「人権」もそういう価値観のひとつとして、友人がそんなに多くなくてもいい、ある一定の共感を得票にすることができたらいいなと思った。実は、ボクは、政権交代でかえって、選挙活動にある種の疲れを感じている今日この頃なんだが、参院選挙、とくに政党名ではなく名前を書く比例選挙に、ちょっと新鮮味を感じた全国大会だった。

(編)ナイス代表取締役 富田一幸



「人権」が「赤い糸」だったあの頃

